

見えないものから育つ

榎田 二三子

桜咲く四月、小学校一年生と三年生になる娘たちと共に、親子四人、関東へもどってきました。四年ぶりの我が家です。親は戻ってきた感覚なのですが、子供達にとってはかなり敵しかったようです。

一輪車に集中するA

四年の間、毎年のように友達のところを訪ねています。娘たちには（特に三年の娘Aは）友達が何人かいます。引越しの日から、幼馴染みと遊び始めました。北陸では、考えられないような春の日さしのなか、子供達は、外で遊びました。その頃、こちらではやっていたのが一輪車でした。Aは以前にも興味をもち、近所のおにいちゃんの一輪車を借りて挑戦していました。そのときは、やっではみたいけれども、そうまわりではやっているわけでもないし、乗れるようになる前に雪のちらつく季節になり、そのまま終わってしまいました。ところが今回は、まわりがみんな乗りまわしています。一輪車

を持っていて、なおかつ三年生ですと、自由に乗りまわしていないと一緒に遊べないのです。乗りまわす事を楽しんで遊んでいるのですから。次の日からAの「一輪車買ってよ。」「一輪車が欲しいよ。」という大騒ぎが始まりました。一輪車に乗れるのはサーカスの人、と親は思っていましたし、まわりが乗れているのを見ても本当に乗れるようになるのかしらと思いました。自転車ならまだしも一輪車となるとどんな物がよいのか迷います。あちこち見て歩くうちに、ある日Aが「一輪車買ってくれない。」とひっくり返って大泣きに泣きだしました。あわてて買いに行き、やっと一輪車を手にしたAでした。

手にいれるまでのAの騒ぎかたは、継続的ですごい気力だったのです。そして、手に入れてからのAの一輪車への集中のしかたは、それにも増してものすごいものでした。朝起きて、学校へ行く用意が終わるとマンシヨンの我が部屋の前で一輪車の練習を始めます。そして学校から帰ってくると、すぐに一輪車を持って外へ飛び出し

ます。夕方暗くなるまで、友達と一緒にひたすら一輪車の練習です。一輪車は、ちょっとでも乗ってみたことのある方はおわかりだと思うのですが、乗れることがとても不思議に思える乗り物です。乗ろうとすると、ひっくつかえるの繰り返しです。足やお尻に青あざのたえない毎日でした。一メートル、二メートルと進み始め、一週間たった頃には、必死にバランスをとるためにすぐ変な格好ながらすいすい乗りまわすようになっていました。乗れるようになると、友達何人かと手をつなぎぐるぐる回ったり、バックしたり、止まったままこぐアイドリングという具合に、まさにサーカスの世界です。マンシヨンの通路や駐車をぐるぐるまわり、大いに遊びまわりました。

集中しないとおもわれるM

ところで、一年生の娘Mはどうしていたかといえますと、遊びまわるAにくっついて歩いていました。Aが一

輪車に夢中になっているとMもやってみたいとは思うらしく、取り合いのけんかが始まります。しかたないので、もう一台買うことにしました。ところが、買ってもらった一輪車は玄関に置かれたままのことが多いのです。一輪車に乗れるようになるには、転んでもひっくり返っても何度も挑戦しなければなりません。Mは転んだり失敗したりうまくいかないことが、嫌な人でした。だれでもみんな、何かできるようになるには努力しているという話を話して聞かせるのですが、とにかく嫌なのでやめてしまいます。そして、たまに友達とやってみるくらいです。親からしますと、Aは集中してやる、Mはどうしてああなんだろう、頑張らないと思いません。

幼い頃を思い起こすと

頑張るってやらないという事は、何も身につけていかないのではないかと思つた私は、なぜだろうと考えまし

た。小さい頃の記録を見てみました。はいはいを始める前、目の前に興味を引きそうなものを置くとAは必死にはいずって行き、掴むのに対し、Mは手をのびして届かないとわかると泣きました。この頃からもう違うのだと思ひました。この世に生まれおち母親のおっぱいを飲むことにしても、Aの場合には母親も初めてですのでAの口と乳房がうまくドッキングしない、二人とも必死でした。Mのときには母親は慣れたもの、いとも簡単におっぱいを飲ませることができたのです。

一つの家庭に育ってもそれぞれ違うとは思っているつもりでしたが、つい同じにやっているとつい思ひがちです。けれども、兄弟関係上Aがいたという事もおおきな影響だったのでしょう。Aは遊びにおいて燃焼し切るといふ感じのときがあり、Mは自分で遊び始めなくてもくっついていけば結構楽しめたと思ひます。けれども、十分満足して遊んだ後のAの顔を見ていて、いいなあと思つていた私は、どうにかしてMが自己充実できる環境をと思ひました。そう思つて選んだ幼稚園で、時に

は晴れ晴れとした顔をみせてくれることがありました。けれども、生来の心配性と人付き合いの不得手な事がネックになり、少したくましくはなったらけれど私が期待したほどではありませんでした。

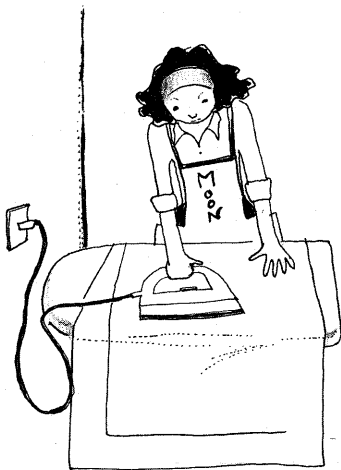
新しい土地での小学校入学

そんな状況でこちらにもどりました。四年ぶりにもどったとはいえ、Mは物心ついてから北陸育ちですので、ここでの生活はゼロからの出発です。毎日緊張し、ランドセルはどこに置いたらいいのだろうか、学校へ行ったら何をすればいいのだろうか、帰り道がわからなくなったらどうしようかと、次から次へと心配していました。幸いなことに小学校入学という点でみんな同じスタートラインです。先生も丁寧に教えてくれますし、Aやその友達の支えもあり、にこにこ顔ではありませんでしたが、学校へ通っていました。

社会性が低い！

学校になれてくれば、そのうちに友達も増え、行き来が始まるのではないかと思っていました。しばらくたつと同じ下校班の友達と約束をし遊び始めました。しかし、思ったほど仲良くなるわけでもなく、どちらかというと、Aが帰ってくるのを待っていて一緒にくっついていくという毎日でした。

新しい土地で、なにかも新しい関係をつくっていく



というのは、Mにとってとても大変なことであろうと思います。幼稚園時代に給食がいやで登園しなくなったことを思えば、給食でいやなものがでて、嫌だなとか、どうすればいいのかとか言いながらも適当にやり過ぎせるだけのたくましさは、身につけていました。けれども、私には不安が残っていました。このときには漠然と、群れに加わらない子、人に対して親しみをあまり持っていない子という感じでしたが、夏休みに心理テストを目にする機会があったとき、Mは社会性が低いということに気づきました。集中することはないし、社会性は低いし、これはいったいどうすればよいのだろうか、と考えてしまいました。母親である私との関係にも問題があるのでしようから、親子でカウンセリングに行こうかと本気で考えました。

集中して考えているM

夏休みも終わりに近づいたある日、またMの心配性が

始まりました。学校行きたくないよ、この通信簿どこに出せばいいのよ、行ってからどうすればいいのよ、何しければいいの、という具合に次から次へと心配しては、学校行きたくないよと言っているのです。その度にこうしたらとか、皆がやることを見ていればわかるわよ、などと言って学校へ行く気になるようにしむけていたのですが、始業式の日には、何ということもなくAと一緒に学校へ登校してしまいました。

あの心配性は何だったのと思ったとき、なんだこれがMの集中する姿だったのだと気づきました。目に見える何かを集中してやりとげるのではなく、思考というかたち、それもまわりからはマイナスにとられるかたちで集中しているMに気づいたのでした。そう気づくと、次から次へと心配事を並べているMに、もういいかげんにしてよと怒らずに、今この子は真剣に考えているのだとじっくりつきあえるのでした。

自分の中にとめるM

山を前にしたとき、がむしゃらに登り始めるのがAだとすれば、まわりからじっくりながめ、いろいろ考えてから少しずつ足を踏みだし、いつのまにか登っていたというのがMでしょう。

じつとながめているM、それは、幼い頃よく見られる光景でした。公園でよその子が遊んでいるのを母親である私にくっついて見ていました。二歳四か月で北陸へ引越した時も、社宅の子供達が近づいて来るとだめーと言って私の後ろへ隠れて見ているのでした。そして、しだいに遊び始めるとというのがMのパターンでした。自分のテリトリーは、しっかり守り、そこがあって初めて行動できるようでした。

発語が遅く、手で作り出すことをしない子は、知覚やイメージの蓄積をしているのではないか、という文をどこかで読みましたが、まさにMはそうでした。二歳四か月までアーウーですませていました。Aが一歳八か月の

時にはべらべらしゃべっていたのにくらべると、かなり遅かったのです。工作の好きな子は、ひまさえあればハサミを持ってチョキチョキやっていますが、Mはそのようなことがなく工作のようなことは、ほとんどした覚えがありません。幼稚園時代は自由画帳はまっ白ですし、クレヨンほとんどそのままでした。本人に聞いてみますと、嫌いなんだもんといっていました。ですが、たまたデザイン的な素敵なものをかくこともあります。そんな時、Mは自分の中でためたものを消化し、あらわしているのだろうかと思ったりします。

見えることにとられる

Mのことを考えてみると、私がいかに見えるものにとらわれていたのかと思います。

見える部分や見えていることが普通より遅かったり変わっていたりしたので、その部分に目がいついてしまいました。ところが、その奥で見えない部分がゆっくり育つ

ていたのです。そしてMは、その見えない部分がじつくりと充実してくると表に見える部分が変わってくるのでした。いいえ、これは、誰でもそうなのでしょう。毎日の生活のテンポの早い今、気を付けていないと落としてしまうことかもしれません。よその子については、大丈夫といえても、とかく自分の子となると目先のことにとらわれ、なにご大切な事なのか見失ってしまいます。

三学期の初め、Mはやはりいろいろなことを心配し、行きたくないと言っていました。けれども、それは二期よりずっと軽くすんでしまいました。慣れたのだからと言ってしまえばそうなのですが、慣れるという表に現れた様子になるまでにMの中でいろいろなものがためられたのだと思います。

Aは、一年生のバレンタインデーの日に好きな男の子にチョコレートをあげたことをずっと黙っていましたし、今は、好きな男の子の名前を友達には言っても私には絶対言いません。Aぐらいの年齢になれば、成長のしるしと思って受け止めています。ところが、先日唐突に

Aが、「私小さい頃、自分がどこからきたんだろうってずっと考えていた」と、話すのです。Aは一歳八か月から喘息になり、かなり苦しい日々を乗り越えてきました。私が毎日を過ごすことでエネルギーを使い果たしていた頃、Aがアイデンティティーの問題とも思えることを見つけていたことを知り、私が見たり、関わってきたことが子供達のほんの一部分であったのだとつくづく思います。

この世に生まれたそのときから、心や知覚やイメージといった大人からは見えないものが、蓄積され育っているのだと改めて認識しました。過ぎてしまった時に対し、あーあの時こんな風にするんだっと思ったのは誰しも同じでしょうが、今という時を共有している人として、見えない部分をたくさん内に持ちあためている人として、与えられた生活の場で共に歩んで行けたらと思っています。

(はるにれの会)